

紙子の構成についての一考察

木野内清子 ○岩佐利佳

(大妻女大)

目的

紙子は、布の代用品として和紙によって作られた衣料類であり、近世、庶民の防寒着等に用いられていたことは周知のことである。また、現在も、修行僧等、一部には伝統的な紙子の使用がみられる。紙子の用途は、主として貧者の衣類とされているが、しゃれ着の側面もあり、布地を組合せた多様な構成がみとめられる。今回は、大妻学院所蔵の紙子を調査し、その構成を通して、紙子による衣生活の一面を考察したい。

方法

遺品の調査

結果

調査した紙子は、江戸時代後期のものと思われる男物の小そでで、胴抜き仕立てになっている。紙子は、柿渋染めの揉み紙で、身ごろの胴の下部分、そでの幅半分、えり先等に使用されている。紙子以外の部分は、濃萌葱の絹紋織地であり、また、この絹地が補強と意匠を兼ねて居敷、わき止り、すその各縫い目の角、えり先等に用いられている。裏地は、柿色の麻地が使われている。

茶の紙子と萌葱の絹地をとり合せて、構成された、紙子の小そでは、保温性と丈夫さが考慮された、しゃれ着であったと考えられる。